

編集後記

あの「夢のような」還暦の修学旅行から、だいぶ月日がたちました。もう、旅行の感動もさめたころでしょうか。遅くなりましたが、ささやかながら、ここに記念文集がまとまりました。

ここで、文集編集の経過や意図について記させていただきます。

年が明け、小生に文集の編集がまかされてからも、ずいぶん日が経っています。じつは、その時点でも原稿の集まり具合が、参加者の4割くらいしかありませんでした。米村くんから催促の連絡が出されるなどしましたが、文は苦手とか、多忙だからなどの理由で、出足はもうひとつ。

ま、集まっただけで出そうかとも思ったんですが、考えてみれば、「還暦の修学旅行」なんて、そう誰でもが経験できるものじゃなく、しかも一生に一回きりの大きな節目を飾るできごとです。参加者25名にとって、これからの、いわば“人生の総仕上げ”あるいは“第三の人生”に向かっている、一つの“かけがえのないステップ”であることは間違いないことと思われました。その“あかし”として、一つは『写真集』がありますが、その時の自分の気持ちや状況を残すには、やはり文章に及ぶものはない。せめて、25名全員、一人も漏れることなく、なんらかの形で、文集にその“あかし”を留めておこう——これが編集者の願いでした。

そこで、手分けして電話取材をとということになり、東京地区は家村・福菌さん、関西地区は大浦くん、九州地区は宮坂くん、とそれぞれお骨折りいただき、小生も東京地区および全体の不足分のフォローなどをさせていただきました。

結果的には取材項目をアンケート形式にして書いてもらったり、取材メモとして送付してもらったりと、いろいろな種類の“材料”が、25名全員分なんとか集まりました。そして、それらを、とりあえず全部パソコンに打ち込みましたが、さて、これをどう編集したらいいのか。

通常は、一定のパターンや内容で統一的に編集するんですが、目の前にある材料は、分量といい、内容・形式といい、あまりにも多様すぎて、通常のようにはいけそうもない。「どぎゃんしたらよかかねー」——結局、“迷案”しか浮かばなかった。が、それでいかせてもらうことにしました。

寺嶋美代子さんの作品



米久保和子さんの作品



つまり、その多様性を活かすことです。編集方針に従って手を加えるのではなく、オリジナル原稿はもとより、取材者のかかわりの跡などにいたるまでも残すこと。そうすることで、この文集にかかわった人達の息づかいも表わせたらしめたもの、というわけです。

とはいえ、いくつかの箇所は、多少は表現に色をつけさせてもらった部分もあります。変なところや、自分のあずかり知らぬ気に食わない文がありましたら、大方それは前田に責任があります。ここでお詫びさせていただきます。それに、家族構成と趣味だけは全員共通事項としました。

また、一部の人を除いて、独断でタイトル代わりの「見出し」をつけさせてもらいましたので、あわせてご了解下さい。

そんなことで、この文集は、いわば雑談集とでも思って読んでもらえればいいのか、と考えています。

ともあれ、文集作成に携わってくださった皆さん、ごくろうさまでした。特に、イラストや写真のレイアウト及びプリントなど、最後の仕上げに多大なご苦勞をおかけした米村さんに、心から感謝いたします。ありがとうございました。

2004年3月

前田照彦